長崎大学 リレー講座 要旨 〈3〉

芸術が人つなぐ力に

地方の資産を活かす地域文化の可能性

アートディレクター
北川（きたがわ） フラム氏

新潟県の十日町市と津南町にまたがる「越後妻有（えちごつまり）」で、2000年から3年おきに「大地の芸術祭」を開いている。世界でも最も雪深い場所。かつては、時の政権に追われた人たちが逃れ住んだ。日照がぎりぎり100日あるかどうかという厳しい気象条件。平らな土地がないため棚田をつくり、川の流れを変えて日本一の米どころになった。

初めてここに入ったのは約20年前。努力を重ねてきたこの地域を、国の方針変更で簡単に捨てていいのだろうかと考えた。「これは俺の仕事」というものをやれなくなるのが、そこに生きる人たちにとって一番つらい。そのこともよく分かった。

町おこしの計画は山ほどある。ところが、企画はあってもやり遂げることがない。僕は、計画を立てた以上やるしかないと思っている。地域の人たちが喜ぶ、そして誇りを持てるようなことをやりたい。ひと言でいえば、「じいちゃま、ばぁちゃまの笑顔を見たい」。生きてきてよかった、幸せなコミュニティーにいるのだと実感してもらいたいと考えた。

大地の芸術祭では、それぞれの集落にアート作品を設置する。置かせてもらうだけでなく、一緒につくってもらう。今ではほとんどの集落が関心を持ち、誘致合戦のようになっているが、最初は、2千回を超える説明会をやっても手を挙げてくれた集落は二つだけだった。

今、「21世紀の美術は越後妻有から始まる」とまで言われるようになった。15年は開催年だが、蔡國強（ツァイ・グオチャン）やイリヤ&エミリア・カバコフ、ジミー・リャオをはじめそうそうたるアーティストが世界中から参加している。今回は17カ国・地域から約180組の新しい作品が出品され、過去の恒久作品も含めると35カ国・地域の約350組の作品に出合える。

この仕事に関わり強く思うのは、単位はあくまで集落ということ。だからこそ、集落ごとに企画を立ち上げた。そうして、その地域の特質を掘り下げたときに全然違う風景が現れる。国が求めていた合併施策と真っ向から違うことをやってきたが、それが「ふるさと創生」のモデルになっている。

アートは赤ちゃんと同じ。手間がかかるし、言う通りには動かない。お金もかかる。しかし、今、大地の芸術祭にはIT企業のエースが続々と参加し始めている。農業と地域、文化、食がおしゃれだからだ。アートが人や地域をつなげる媒介として働き出している。